

とちぎし
かっせんば
う
栃木市の合戦場で生まれる

小平浪平は、1874年(明治7年)1月15日、栃木県下都賀郡家中村合戦場(今の栃木県栃木市都賀町合戦場)で小平家の次男として生まれました。当時の栃木は巴波川の舟運(舟を使ってモノを運ぶこと)で栄えており、浪平の父も舟に関係した仕事をしていました。

浪平は淑慎学舎(今の合戦場小学校)に通い、教育熱心な両親のすすめで、11才から転校して栃木小学校へ通いながら、さらに朝は英語学校に、放課後はじゅくにも通って一生けん命に勉強しました。

ところが浪平が16才のとき、父が事業に失敗し、借金を残して49才のわかさで病死してしまいます。医者になることを目指して勉強していた浪平の兄・儀平は、家族をささえるために学校をやめて働く決断をします。

そんな兄から「おれの代わりにお前が東京で勉強するんだ」と言われた浪平は、これまで以上に勉強に打ちこみ、17才で第一高等中学校(今の東京大学教養学部の前身)に合格しました。

でんきこうがく
まな
電気工学を学ぶと決める

1894年(明治27年)、第一高等中学校の4年生になった19才の浪平は、大学受験を目指

前にして進路にまよっていました。

「工学部に進みたいけど、そのなかで何を勉強したらいいのだろう」
「工学」とは、科学や実験を使って社会の役に立つものをつくる学問で、そのなかに建築や造船、機械電気などさまざまな分野があります。
なやんだ浪平は、浪平が子どものころに勉強を教えてくれた小説家の村井弦斎をたずねます。すると村井は「浪平くん、これから時代は電気だよ! まもなく日本中に電灯がつく時代が来る。今はじょう気で動かしている機械も、電気で動かすようになる」と熱く語ります。

それを聞いた浪平は、「いつか社会にこうけんできる人間になりたい」と電気工学を学ぶことを決意。そして2年後、浪平は22才で東京帝国大学工科大学(今の東京大学工学部)電気工学科に合格しました。

おじ
教えて!
とち
介

★ 村井弦斎って?
明治・大正時代に活躍した作家だよ。代表作『食道樂』は、当時としては新しい料理や食材を題材とした小説で、大ベストセラーになったんだ。村井は大学をやめた後、あちらこちらを放浪していたときに浪平の家にいたことがあって、浪平のことを実の弟のようにかわいがっていたんだって。